

ある謎解き作家の遺書

目次

出題編

5

解決編

59

出題編

① まずは本書の物語を読み進めてください。

必ず最初のページから読み進め、

先を飛ばして見ないようにご注意ください。

② 途中で十六問の謎解き問題が登場し、

「解決編」のページが現れます。

ご自身で謎に挑みたい方は、答えを導き出してから、
解決編へ進んでください。

ベランダの柵を越える。

マンションの五階の高さから、はるか下の地面が見える。

あとは柵から外へ踏み出すだけで、この命はすぐに終わりを迎える。数々の謎を生み出してきたこの脳も、ただの肉塊にくかいになり果てる。

それでも、不思議と悔いはない。あれだけ楽しめる謎を最後に残したのだ。謎解き作家として、有終の美を飾ったと言えるだろう。SCRAPの社員にとって、これは理想的とすら言える最期さいごなのではないか。

そんな思いを抱きながら、柵にかけた足に力を込め、外に踏み出した。

三十年弱生きたこの肉体が、頭を下にして、死に向かって一直線に降下していく。

「ええっ!? 舟木が?」

佐上誠輔は出勤早々、思わず声を裏返した。同期入社 of 舟木亮太郎が、自宅マンションで遺体で見つかったと聞かされたのだ。

「今朝、マンションの庭の、舟木君の五階の部屋のベランダの真下の位置で、亡くなっているのが発見されたんだって。自殺の可能性が高いって。私も、さっき警察から電話で知らされたんだけど……。信じられないよね」

株式会社 SCRAP 書籍編集部謎制作課の千葉奈々子課長が、涙を拭いながら説明した。息子二人を大学生まで育て上げた、頼れる上司の涙を、誠輔は初めて見た。

「舟木、先週まで元気だったのに……マジで信じられないよなあ」

先輩社員の竜崎哲広が、落ち込んだ様子でデスクに頬杖をついた。中年太りの頬に手が食い込む。

「まあ、時々病院には行ってみたいだけど」と千葉課長。

「たしかに、通院はしてましたよね」誠輔もうなずく。

「あれは眼科じゃなかったっけ。俺はそう聞いてたけど」と竜崎。

「いずれにしろ、命に関わるようなことじゃないよね。何かの発作とかいうわけじゃなくて、本当に自殺なのかな……ああ信じられない」

千葉課長がまた涙を拭い、鼻をすすった後、最年少の可憐な女性社員に声をかける。

「梨帆ちゃん、大丈夫？」

すると、天野梨帆は自分の席で、目を真っ赤にして涙ぐみながら、「はい」とかすれた声でうなずいた。舟木や誠輔より三年後輩で、この課で最年少の彼女は、ひとときショックを受けているようだった。彼女が舟木と交際していたことを、誠輔は知っている。千葉課長と竜崎も、知っていたかもしれないし、はっきりとは知らなくても薄々勘付いていたかもしれない。

謎解きイベント「リアル脱出ゲーム」の制作運営でおなじみの株式会社SCRAPは、謎解き系の書籍も制作出版している。その書籍部門の謎解き作家は、在宅のアルバイトを含めるとさらに多いけど、正社員は亡くなった舟木を含めたこの五人だった。仕事内容は、本に載せるための謎解きを毎日ひたすら作ること。基本的にはほぼそれだけだ。好きだからやっていられるけど、かなり浮き世離れた仕事だろう。

そのメンバー五人の中の一人、舟木亮太郎が、突然自殺してしまったというのだ。都内の一流大学を卒業後、大手企業の内定を蹴ってまでSCRAP社に入った大の謎解き

マニアだけあって、質の高い謎をハイペースで作る優秀な謎解き作家だった。会社にとつて大きな損失であることはもちろん、同僚の精神的ショックもあまりにも大きい。

特に誠輔にとっては、同期入社の舟木は親友でもあった。お互いの家に遊びに行ったことも、二人で酒を飲んだことも何度もある。他の誰にも話せない愚痴をこぼしたり、恋愛の話だつて何度もしてきた。舟木は酒好きだったけど、決してタチの悪い絡み方はせず、いつも楽しい酒だった。

そんな舟木の死を、月曜日の出勤直後に突然知らされて、誠輔はただ言葉を失うばかりだった。

「自殺するほど悩んでたなら、相談してくればよかったのに」千葉課長が涙声で言う。「遺書とかって、あったんですかね」竜崎がつぶやく。

「うん、あったみたい。だから自殺だと思われてるみたいだけど」千葉課長がため息をつく。「私も、出勤してすぐかかってきた警察からの電話で、十分ぐらい前に知らされたから、まだ動転しててさ……。ああ、コーヒー飲めば少しは落ち着くかな」

千葉課長はつらそうに席を立ち、コーヒーメーカーへと歩いた。

その時、オフィスの電話が鳴った。とつさに誠輔が電話を取る。

「はい、株式会社SCRAP書籍編集部です」

「あ、もしもし。私、高円寺警察署刑事課の田所と申します。舟木亮太郎さんの件で、たどころ

お電話させていただいたのですが」

年配の男性の声だった。高円寺といえば、舟木のマンションの最寄り駅だ。つまり、この田所氏は、舟木が亡くなった件を担当している刑事だろう。

「ああ、はい……先ほど、僕も課長から、舟木が亡くなってしまったと聞きました……。あ、自己紹介が遅れました。僕は、佐上と申します」

誠輔はたどたどしく自己紹介する。職場で取った電話の応対にしてはビジネスマナーが全然なっていないかったが、この状況ではさすがに仕方ないだろう。

「あ、どうも」少し間があった後、田所刑事が尋ねてきた。「課長さんというのは、女性の方ですかね。えっと……千葉さんという」

「はい、そうです」

「じゃ、さっき私が電話した方ですね」

「あつ、代わった方がよろしいでしょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ。そちらの謎制作課でよろしいですかね。そちらの皆様にお伝えいただければ」

田所刑事はどうやら、千葉課長に電話した際に、この謎制作課という部署の存在は聞いたようだ。

そして、田所刑事は誠輔に、妙な頼み事をしてきた。

「実はですね、そちらの謎制作課の皆様に、捜査へのご協力をお願いしたいんです」

「協力？ 事情聴取とか、そういうことですかね」

「いや、というよりは……」

またしばらく間が空いた後、田所刑事は言った。

「謎解きへの、ご協力を」

2

同僚と四人で電車に乗りながら、誠輔は先ほどの電話を思い出していた。

「いや、あの……僕らは、SCRAPの謎解き作家ではありませんけど、警察の方の謎解きには、あまり力になれないと思うんですが……」

誠輔が言うと、田所刑事はこう答えたのだ。

「あ、ご協力いただきたいのは、そっちの、SCRAPさんが手がけているような謎解きなんです。どうも、それを解かないといけないようでした」

「えっ……どういうことでしょう？」

「まあ、とにかく来ていただきたいんです。来ていただければ分かるので」